



坂口?子と戦争 「灯」を通して

著者	彭 妍蓁
雑誌名	國文學
巻	100
ページ	299-309
発行年	2016-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/10184

坂口襍子と戦争

—「灯」を通して—

はじめに

「灯」は一九四三年四月『台湾文学』（第三卷第二号）に発表され、第一回台湾文学賞で、候補者となった作品である。台湾文学賞では、呂赫若の「財子壽」と最後まで争ったが、この賞は台北の弁護士陳逸松の資金提供で運営されていたため、最後は台湾出身の作家に授与することになり、呂赫若が受賞した。そして、坂口襍子には特別奨励賞を授与した。小説のあらすじは次の通りである。

夫の勝野は小学校を出る前に両親を失い、たった一人で今の店を築いてきた。同じく「私」も身寄りのない、養女にやられ、いじめられ、苦勞に苦勞を重ねて、生来の負けん気で世間を渡ってきた。結婚して十年たった現在でも、男のように、己の弱

彭 妍 蓁

味を他人に見せまいとする孤兒の保身の鎧よろいを脱ぐことはできなかった。勝野と知り合つて同じ境遇を慰めあい、やつとこゝまこゝまで共に築いてきたのに、夫が赤紙一枚で戦場に送られて行く。勝気な彼女は、最初は駅まで見送りに行かないと決めたが、夫が家から出た後、部屋に一人では居ても立つても居れぬ焦燥を感じ始め、どうしても落ち着かないので、忘れていった手拭いをとどけることを口実に、駅まで駆けつけるのである。

楊達は「灯」に対して次のように語った。

この小説は出征する夫を送る商家の妻の心理を克服マクに描破したものであるが、大御心を体して国を愛する気持は一つでも、人はそれくくの生活様式又は環境に依つて、その思考方法を左右されるものである。西川氏が輪轉機で百の

決意を送り出すことが正しいならば、吾々が実生活から一パーセントの決意を体得しても正しくないとはいへまい。

喜んで夫を送り出したい気持はありながら、そこに色々の心配や悩みもあるのは当然であらう。この色々の心使ひを噛みしめ噛みしめて、その上に築き上げられた喜びや安心こそ真実なるものなのである。(中略)

これは作者のリアリズムの精神に依るものなのである。片寄ることのない写実的精神の賜物なのである。

『日本精神に就いて説く場合、千万言費して怒号するよりは、こんな美しい一短編小説がどれ程吾々の胸を打つか知れない。』と呉新榮君が興南新聞に書いたが、全く同感である。^①

一九四一年、太平洋戦争勃発後、日本政府は戦力増強のため、台湾作家の徴用を始めた。総督府情報課長の森田は「決戦文学」についての議題を提出した。作家たちに対し、戦時宣伝の要請に寄与すべきだと述べ、総督府の官僚たちが彼らの一挙一動を監視し、指導し、検閲したのである。当時、台湾文壇において文学界の主流となった『文芸台湾』、『台湾文学』両誌ともこの戦時体制に組み込まれた。西川満が主宰した『文芸台湾』は、

積極的に国策協力の意志を表明し、台湾人の皇民化を促すために戦時詩や皇民化劇等の特集を行い、戦争協力作品を掲載していた。それと比べて『台湾文学』は時局を扱った作品はさほど多くはない。主に戦時下のありのままの現実生活や皇民化運動の矛盾を描き出す作品がほとんどであった。坂口襍子は『台湾文学』陣営の一人として、楊逵が称賛したように、リアリズムの精神を持って創作していたのである。

坂口は台湾に滞在している期間(一九四〇～一九四六年)、台湾人の皇民化政策に対する疑問や様々な政策を善としない旨のことを描写した作品「鄭一家」(『台湾時報』一九四一年九月号)、「時計草」(『台湾文学』第二巻第一号、一九四二年二月)などを発表した。そのため、日本政府に対して植民地政策を批判する作家ということで、戦争非協力者というイメージで見られがちであった。そして作品「時計草」は当局の厳しい削除処分を受けることにもなった。

このような情況下において、太平洋戦争以降は、坂口も徐々に国策に巻き込まれ、何篇かの戦時体制下に沿った小説を書くようになった。すなわち、太平洋戦争以降の彼女の作品は、戦争と切り離しては考えられない。今回扱った作品「灯」のほか、「曙光」、「遺書」、「秋夜」「隣人」「川は流れ止まず」^②なども、戦

時体制下の国民を題材としたものである。それでは、彼女は戦争をどのように受け止めていたのだろうか。また、坂口は当時戦争に対してどのような考えを持ったのか。本論では、坂口襦子の戦争を扱った小説「灯」を通して、彼女の戦争に対する心境の変化を考察してみたい。

二、銃後の女性

「灯」の冒頭は夫勝野の召集令状が届いた時、主人公「私」の心境から始まる。

勝野に赤紙が来た時、私はドキツとして思はず顔が固く
なつた。

勝野が、俺たちには、召集がありさうにもないなあ、と
始終言つてゐたのを、勝野が密に待つてゐる氣持であると
は思はず、あ、それではもう征く事もないのであらう、
と心を許してゐた——真にもう思つても冷汗の出る心持で
ある。年月、心の中にしこりのやうにこびりついて離れな
かつた夫の應召と言ふ事を、この日頃忘れて暮らして来た、
と言ふのは、何と言ふ自分勝手な私だつた事か。そんなう

かつさだつたから、あのやうに顔の色も變る程なうろたへ
方をしたのである。何と言つても追つ、かぬ事であるから、
その時の見苦しい狼狽振りが、身も切られる程、私には切
ないのである。(二百五十七頁、傍線は筆者による)

主人公「私」は、夫の勝野が話した「俺たちには、召集があ
りさうにもないなあ」という言葉をずっと信じているので、突
然の赤紙を貰つた時、顔の色も変わる程の狼狽をしたのである。
一九三七年七月七日に起こつた日中戦争は三ヶ月で終わるつも
りだったが、中国の抵抗運動はだんだん活発になり、日本は長
期戦の泥沼に落ち入ることになった。戦争が延期すると日本軍
にも戦死者は増え、食品、物質等は減つていった。一九三八年、
日本政府は戦争に必要な人員や物質を軍部に自由に供給するた
め、国家総動員法を制定した。ついで、労働問題、生活必要物
質、価格、出版言論等様々な統制令³⁾が作られた。一九四一年一
二月八日、日本は「米国及英国二対スル宣戦ノ詔書」を宣布し
て米国と英国に宣戦を布告した。この戦争はどんどん広範囲に
展開していき、戦争動員人数も日々増加していった。増員の必
要性に迫られ、台湾にも召集令状「赤紙」が配布されることに
なつた。当時、「赤紙」を受け取つた家庭は「一瞬虚を衝かれ、

走馬灯のように過去のできごとが頭をかすめ、妻の顔、子供の将来のことなど、さまざまの思いが入り乱れた⁴のであった。

小説「灯」のはじめの部分には、夫の勝野と「私」が店で慰問袋三百個を午後の汽車に間に合わせるために、店の者が総動員で仕事をする様子が描かれている。その時、役人が入ってきて手に持った「赤紙」を渡した。その瞬間、「私」は夫勝野の緊張する顔を見る勇氣はなかつたので、奥の部屋へ一人入った。その後、勝野も黙って入ってきた。「おい、泣いてるんぢやなからうな」と低いけど厳しい声で言った。

「泣かないよ。あんたが出て了ふ迄、涙一滴こぼしやしないよ。こぼしてほしいと言つたつて、出つこないやね。」

「お国の為だ、と今更、お前に口説かうとは俺も思つちやいなかつた。きつと、確りしてゐてくれると、信じてはねたんだ。然し、いざとなつて、お前がどんな顔をするか、と實は心配もしてゐたんだ。安心したよ。」

私が夫の事を思つてゐたやうに、夫も亦私の事を心にかけてゐてくれた、と思ふ事は、そんな場合であるだけに、私の胸をひどくゆすぶつた。私は、まるでうらはらな口をきいてゐながら、今にも泣き出しさうなのを耐へてゐた

けに、その夫の言葉に、ドツとこみ上げてくるものがあつた。

然し、泣いてはならぬ。日本の女性は、決して、征く夫に涙を見せるものでない。私は、全心中、歯をくひしばつて、泣顔を耐へた。 (二五九—二六〇頁、傍線は筆者による)

当時の女性は軍国の母・妻として息子や夫を戦争に送り出す時、涙を見せることさえ許せなかつたのである。夫(息子)が出征する時、妻(母)が泣くと生きて帰つて来られないという流言もあつたためである。また、坂口禰子は一九四三年一月『新建設』に掲載した「母ありて兵つよし」の中で、当時台湾皇民奉公会台中州支部長だつた森田俊介の次のような言葉を記している。

母の愛情と言ふ事は、真に尊く、最も細やかである。その愛情を振り捨て、夫を、子を送り出すと言ふ事は、竝大低の事では出来ない。然し、その苦痛を忍ばねば、国は何時迄も榮えてゆく事は出来ない。命を捨てて国を守る兵どもの後にあつて、国を守る兵を強くするのは、母であり、妻である。その母や妻が強い心を持つてゐなければ國はつよくならない。家も亦同じである。

この森田の言葉は一九四五年、台湾で徴兵制を実施する前に、「兵の母・兵の妻」をテーマとして、志願兵の母や姉等を集めて行った座談会の席上で話された内容であった。その座談会に、坂口禰子も出席した。当時徴兵令を宣伝するために、台湾全島であちこちに感謝決意大会が開かれる。兵の妻、兵の母の言葉も新聞に特集され、本島人の母親達が「そんなに立派になって、お国の為に少しでもお役に立ちます事を、とても喜んでおります」と語っている。坂口自身も「母ありて兵つよし」で「陛下のお役に立つ子を育てなければならぬ。これからの本島の母達、娘達は、今こそ自らの使命の重さ、尊さ、美しさ、有難さに感激し、その感激を子の上にふりそ、がねばならない。その感激の中に育つ子が、やがて防人の一人として出征く時、母達は、初めて、真の母親としての喜びに涙垂れるであらう」と述べている。すなわち、日本の軍国主義体制が進んでいくと共に、坂口もそれに賛同し、その精神に依拠した作品を描こうとしていたのである。「灯」の中で、主人公「私」は、最初夫が「赤紙」を受け取った事に驚き、「嘘かもしれない」と思ったけど、お国のためなので、彼の出征を容易に受け入れた。作品には次のような場面もある。

「たつた一人の弟だよ。私達は、未だほんの子供の時に二人だけになつたんだよ。それから、どんなに生きて来たか。お貞さんもいろく聞いてるだらうがね。私しや、お国の為にその弟を差上て、使つて頂く事を、喜んでゐるよ。よくまあ、そのやうな尊い事にお役にたてて頂く、と喜んでるよ。喜んでゐるのは、本當の事だよ。お貞さん。私しや見榮や張りでにんな無體らしい。事を言やしない。言やしないよ。だけど、どうして、お貞さん。お前さんも悪い。どうして子を産んでおくれなかつたのかね。勝野の家も、あれが戦死をすれば後が絶えるんだよ。お貞さん。何故、弟の代わる者を、三人でも五人でも十人でも産んでおくれなかつたのかね。」

〔中略〕私は、切ない程、子供が欲しかつた。聞けば聞く程、遠い先々に迄つゞいてゆくらしいこの戦争に、私は自分で産み、育てた子を一人でもいゝ、お役に立てたかつた。夫が出征と決まつてからのこの五六日の間の、それは私の心の中に芽を出した忠義とでも言へる心であつたらうか。おこがましく忠義と名付けられぬ真に小さなそれは希みであつたが、夫と戦争が、直接結びついてからの私は、そのやうな事を思ふ迄に成長していつたのである。

（八二―八三頁、傍線は筆者による）

一九四一年一月に「人口政策確立要綱」が閣議決定され、「高度国防国家に於ける兵力及労力の必要を確保する」ため、人口増加が緊急の務めとされていた。「男子は二五歳、女子は二二歳で結婚して五人は子供を作れ」という国家のために、銃後の未婚男女を対象として「結婚報国」という国策結婚政策を強力に宣伝したのである。小説で主人公「私」が「自分で産み、育てた子を一人でもいゝ、お役に立てたかつた」と述べるように、坂口も当時の国策スローガン「お国の為に、産めよ殖やせよ」に同調した作品を描いたことが分かるだろう。

三、「灯」の主題について

赤紙が届いて、出征する日の時間が分かってから、主人公「私」は「やっぱり駅にはいかないだろうかな」と何回も繰り返して話した。そして、征く日の朝、家から車に乗った夫の姿を見出した「私」はただ茫然としてだんだん遠くなった車の後ろを見送った。

部屋に戻つて、ペタリと火鉢の前に座り込むと、其処いら中が、からつぽになつたやうな気がした。置いてある道具類が、チグハグな気がした。私は、まるで長い旅から歸つた人のやうにボンヤリと疲れ切つて座りこんでゐた。豫期してはるたが、侘しさが、水のやうに押寄せて来た。私は、心をひたしてゆく侘しさに、無抵抗に心を任せてゐたが、居ても立つても居れぬ焦燥を感じ始めた。会いたい、もう一度会いたい。私は、落着かうとして眼をつむつた。赤い襷に鮮やかに書かれた、夫の名が浮かんで来た。私はうつ伏して身もだえした。会いたい、もう一度会いたい。突然堪へられぬ思いに突動かされて、私は不意に立上つた。夢中で土間に降りると、脱捨てたまゝ、の下駄を突かけて外へ跳出した。 二二七頁、傍線は筆者による

勝ち氣な主人公「私」は最初は駅まで見送りに行かないと夫に話したが、やはり落ち着かず忘れていった手拭いを届けることを口実に車を呼んで駅まで駆けつけた、その主人公の矛盾した気持を作品では如実に描写している。「あんた、忘れ物。手拭いだからいゝけど、戦地で鉄砲をわすれたら、どもならんよ。」夫勝野は黙ってそれを受け取った。また足を止めた勝野は「私」

の睨むように見つめている目をじっと見たが、「行つて来るぞ。」と言った。「私の体に稲妻のやうなものが鋭く走った。それは、私の初めて経験した。夫への命がけの愛情の燃える熱であつたらうか。私の類はかつかと火照つた」。坂口は「灯」の中で、出征する夫に対する妻の愛情を克明に、そして巧みに描写している。初めて「赤紙」を貰つた時の女主人公の心境、さらに夫への愛情を再び感じた彼女の心の動きが痛切に伝わるのである。坂口は女性心理の細かい変化をうまく表現していると言える。

戦後、尾崎秀樹は「灯」に対して次のような評価を与えている。

坂口櫛子は、一言も国策的な言辞を弄してはいない。つとめてそういった空々しさからは眼をそむけ、むしろ戦争の緊張が一組の夫婦者に及ぼす切実な問題の側に焦点をしかつている。男を戦場に送り出してゆく日本の女性の哀しい訴えが、紙背に渦まいているような作品なのである。

尾崎の言うように、坂口はこの作品の中で当時の国策に関するスローガン、例えば「国家のために若人よ結婚を!」「生めよ殖やせよお国の為に」「勤勞報國」などの言葉は一切も出さな

った。ただ、男を戦場に送り出していく人妻の緊張した気持ちと、侘しさが切ないほどわかるように描くことに焦点をしかつている。ただ、坂口が「灯」に描こうとしたのは、出征する夫への愛情を表現し、当時統治時代下の女性の哀しい訴えを描くだけではなかつたようだ。「灯」の最後の場面には、次のような描写がある。

私は、芝草の上にひざまづくとき、思はず手を合わせてゐた。涙は何時の間にか乾いて了つてゐた。

私は、合掌した手とその燈明とが、私の心の中でピタリと一致したのを感じた。私は灯を拜みながう、その灯を通じて、遙かな戦地に征つた夫を想つた。夫の赤襷を掛けた凜々しい現實の姿が、その灯の彼方にあるやうな気がした。そして更に、その夫を通じて、私は、萬世一系の帝の、奇しき迄に尊い御姿を拜んだ。

夫を機縁として、初めて私の心の中にともつた灯は、永へに消ゆる事はないであらう。例へ、私の血の繼ぐ子孫はなくとも、私はその灯の、永へに消えぬ事を信ずる事が出来るのである。 (二九二頁、傍線は筆者による)

夫を送った後の主人公が、神社に入って、神社の灯の前に跪いて、その灯を通じて、「遙かな戦地に征つた夫を想い」、「萬世一系の帝の、奇しき迄に尊い御姿を拜んだ」のである。この作品の題名が「灯」であることから、この部分が非常に重要な意味を持っていることは言うまでもない。「私」の心の中にともった灯を通して、「私」と「遙かな戦地に征つた夫」と「萬世一系の帝」が一つに結ばれている。そうして、「私」はその灯によって、夫のいなくなった不安や寂しさを克服するのである。井手勇は、この最後の場面について、次のように指摘する。

ここには坂口襦子自身の一種の決意が秘められていたのかも知れない。彼女は、哀しみを克服するために、夫の戦う「聖戦」の意義を強く認識し、妻として夫を送り出すことこそ国家への最大の貢献なのだということを、自らに言い聞かせていたのではないだろうか。当時、坂口襦子はたった一人の兄をすでに戦争へ送り出しており、いつ来るかわからない夫への赤紙に対して心の準備をしておくということは、彼女一人の問題ではなく、戦時下に生きる妻たちに共通した問題であったはずだ。このラストシーンには、彼女の悲壮なまでの決意を吐露することによって、その時代に

生きる妻たちを励まそうという思いがこめられていたのではないだろうか。夫を送り出す妻の心理描写が極めてリアルなだけに、このラストシーンが当時の読者に与える感動も大きかったのではないかと思われる。⁹⁾

井手勇は、「灯」が戦争批判を意図した作品であるならば、作者はこのような最後の場面を用意するだろうかと指摘する。坂口襦子のこれまでの戦争を扱った小説、例えば「曙光」「時計草」などは、どれも戦時体制の中で人々がどのように生きるべきか、その苦しみをいかに克服するかということに主に眼が置かれたものであり、国家の政策自体に疑問を投げかけるものはなかった。坂口の自伝小説「母の像 第二部第一章(三)」「花泉」四月号 昭和四五年四月一日)の中に、次のような記述がある。

「鄭一家」「曙光」の小説集は、まだ表現の自由が、島内で或程度のルーズさを保っている時期に発刊された。幸運だった。皇民化運動の矛盾を書いた『鄭一家』、台湾の移住民の農業移民を描いた『曙光』が活字になり、出版された迄が、日本の戦力の峠だったかもしれない。哀微してゆく

戦線、国力の貧しさへの傾斜は、軍部の焦燥に代わり、台湾の島内事情を、戦力参加へ引きずってゆくためのあわただしい転換が、微力な令子（＝衣子）のバラの棘ほどの小説にさえ、神経を配らねばならぬことになった。それまで殆ど放置されていた台湾の文教政策が、俄かにひきしめられ、植民地的自由さが、一枚ずつひき剥がすように、奪われていった。『しばらくは何も書けないなア。』『そんなことはないさ。君の。灯だ。』って、張文環君は、ギリギリのところで、終りまでハラハラしながら読んでいった、と言ってよこしたじゃないか。終りの結びが国策に沿った線へ戻ってホツとしたそうじゃないか。カムフラージュしなさい。

ま、毎週子供のドラマで手いっぱいでもあるが、できるだけ書いとくさ。』（襦子の夫の言葉）【（一）は中島利郎注】

すなわち、「曙光」「時計草」など戦時中に描かれた坂口の作品が、最終的には国策を肯定する形で終わっているものの、ただいささかの権力への抵抗は描かれていたのである。つまり作品に「バラの棘ほどの」ささやかな抵抗が隠されていたことが分かる。それは、戦争中に自由に活動できなかった作者の哀しさであったと言えるであろう。小説「灯」が何の削除もなく発

表できるのは、おそらく小説の末尾の「そして更に、その夫を通じて、私は、萬世一系の帝の、奇しき迄に尊い御姿を拜んだ。」という部分によってカムフラージュされたからであろうと考える。そうした意味において、彼女が「大東亜戦争」や皇民化に抱く理想と、同化政策に向ける批判とは矛盾するものではなかったのである。当時、坂口襦子が大東亜戦争の意義を信じ、よき皇民であろうとしたことに間違いはないであろうが、一方、戦争の後期作品には厭戦的な気持も書かれていたのである。

おわりに

本稿では、戦時下の女性の心情を描いた小説「灯」を論じた。前述したように、坂口襦子が初めて『台湾文学』に投稿した小説「時計草」は検閲によって最初の二頁と最後の二頁以外は削除されるといふ厳しい処分を受けた。「時計草」が削除処分を受ける前に『台湾時報』（一九四一年九月号）に、内台結婚や皇民化の問題をテーマとした小説「鄭一家」も発表している。この二作の内容によって坂口は「植民地政策の批判した」「台湾人作家と同じ立場に立って、侵略戦争と皇民化を糾弾した」作家だというイメージで見られがちである。しかし、坂口の「時計草」

にしても、「鄭一家」にしても、同化政策を批判しているからといって、皇民化そのものを否定していたと断定することはできない。黒川創は「灯」と「曙光」は、移住日本人の家族を描いていずれもすぐれた作品だが、それらは次第に、いわば「高等戦時体制的」な作風に向かう一面を持っていた⁽¹⁾と述べ、坂口の戦争協力の姿勢を指摘したのである。実際、坂口の小説では、日本人の社会を描いたものが圧倒的に多数を占め、例えば、農業移民を扱った「黒土」、「春秋」、「曙光」、戦時下の生活を描いた「微涼」、「灯」、「遺書」「川は流れ止まず」等があり、これらはすべて日本人社会を描いた作品である。そこには作者の国策に忠実な考え方が発露しているようである。だが、本稿で扱った「灯」は、よき皇民を描いただけではなく、戦争末期の悲しさ、辛さなども描かれ、戦時下女性の姿を赤裸々に描写している。戦時中に描かれた作品を考える場合、当時の検閲による言論弾圧事情や、軍国主義思想など戦時下の特殊な事情を考慮せねばならず、国策に忠実な作品であっても実際に作者が戦争を賛美し、協力していたのかどうかは、単純には断定できないだろう。

注

(1) 伊東亮著「糞リアリズムの擁護」『台湾文学』第三巻第三号 一九四三年七月三十一日 一〇三—一〇四頁、伊東亮は楊逵のペンネームである。

(2) 初出：

「曙光」『台湾文学』第三巻第三号 一九四三年七月三十一日 七二—一〇三頁

「遺書」『台湾公論』一月号 一九四三年一月一日 一〇三—一〇五頁

「秋夜」『台湾鉄道』一九四三年二月一日 三三五—三四一頁

「隣人」『台湾文芸』第一巻第三号 台湾文学奉公会発行 一九四四年四月一日 四五—五七頁

「川は流れ止まず——父母に代りて記す」『台湾文芸』一七号 一九四四年二月一月

(3) 一九三八年四月一日、閣議によって「国家総動員法」が公布された。「国家総動員法」は人的・物的資源の強制的動員を可能にするものであった。そして、「国家総動員法」に基づいて、「国民徴用令」(一九三九年七月)、「価格等統制令」(一九三九年一〇月)、「生活必需物資統制令」(一九四一年十二

月)、「言論、出版、集会、結社等臨時取締法」(一九四一年十二月)等の様々な統制令がつけられた。

(4) 竹中信子著「第一〇章 日中戦争前後」(『植民地台湾の日本女性生活史 昭和篇(下)』 田畑書店発行 二〇〇一年一〇月二〇日、三九頁)

(5) 同注4

(6) 坂口禰子「母ありて兵つよし」(『新建設』 一月号 一九四三年一月)

(7) 中村幸「人口政策の諸相——結婚報国をめぐる——」(『戦争と女性雑誌——一九三一年～一九四五年——』 ドメス出版 二〇〇一年五月 一二七頁)

(8) 尾崎秀樹著『近代文学の傷痕——旧植民地文学論』 一六〇頁

(9) 井手勇著「戦時体制下の日本人作家」『天理台湾学会年報』第7号 一九九八年六月 三四頁

(10) 中島利郎「坂口禰子作品解説」(中島利郎・河原功・下村次郎編『日本統治期台湾文学 日本人作家作品集』第五巻 緑蔭書房 一九九八年七月、五六〇頁)

(11) 黒川創著「解説 多面体の鏡」(『外地』の日本語文学選1. 南方・南洋／台湾』新宿書房、一九九六年一月 三二五頁)